

2023年1月8日顕現後第1主日・主イエス洗礼の日

旧約聖書 イザヤ書 42章 1-9節  
使徒書 使徒言行録 10章 34-38節  
福音書 マタイによる福音書 3章 13-17節

新しい年も2回目の主日を迎えました。本日は、顕現後第1主日ですが、同時にイエス洗礼の日でもあります。イエス様がバプテスマのヨハネから洗礼を受けたことを改めて認識する日です。昨日は、昨年12月4日にわたしたちの教会で洗礼を受けられた方が、聖アンデレ主教座聖堂で主教様より堅信を受けられました。わたしたちの教会でも新しい歩みが始まっています。

本日の「旧約日課」は「**見よ、わたしの僕、わたしが支える者を。わたしを選び、喜び迎える者を**」（イザヤ42:1）とあります通り、「主の僕」について言及しています。「主の僕」というと、53章が有名ですが、ここにおいても示されます。まず、「**彼の上にわたしの霊は置かれ、彼は国々の裁きを導き出す**」（イザヤ42:1）と、彼が主なる神様から特別な霊を授かり、その働きが諸国のあり方を導くものであることが示されます。しかし、「**傷ついた葦を折ることなく、暗くなってゆく灯心を消すことなく**」（イザヤ42:3）と、彼の謙虚さや優しさも明らかにされています。そして、彼はそのような謙虚さと優しさをもって、「**裁きを導き出して、確かなものとする**」のですが、新しい『聖書』でこの箇所は、「忠実に公正をもたらす」となっています。口語訳では「真実をもって道を示す」となっていました。訳がそれぞれ異なりますが、ここが示している事柄は、「主の僕」が主なる神様の意思通りにこの世界に正義をもたらす方であること、そのような歩みを通して、歴史を動かす主なる神様のご計画を示す方であるということです。

その計画を示すための最初として、「**神は天を創造して、これを広げ、地とそこに生ずるものを繰り広げ、その上に住む人々に息を与え、そこを歩く者に霊を与えられる**」（イザヤ42:5）とあります。最初に主なる神様が天地創造の神であることが確認されるのです。このことは、わたしたちも毎主日ニケヤ信経などで確認している事柄であり、『聖書』の信仰の大前提です。

次に、主なる神様が、彼を「**民の契約、諸国の光として、あなたを形づくり、あなたを立てた**」（イザヤ42:6）ことが明示されます。主なる神様は、「主の僕」が、人間に守るべき約束事を示し、尊ぶべき道標・光を示す存在であるとしているのです。そして、「**見ることのできない目を開き、捕らわれ人をその枷から、闇に住む人をその牢獄から救い出すために**」と続きますが、それは彼の歩みが、今苦しみや悲しみの中にある人を解放する歩みであることを示しています。

これらの「主の僕」による主なる神様のご計画の示し方は、力を持って何かを示す、あるいは様々な意味での勝利をもって何かを示すという現象とは異

なります。また、先に述べたように、「イザヤ書」53章にある「苦難の僕」の姿と共通する事柄を感じます。しかし、「イザヤ書」が書き記されたのち、イスラエルの歴史において、歴史的に「主の僕」が誰であったかという問い、「主の僕」にかかわる歴史的現象とは何であったのかという疑問が起こりますが、『聖書（旧約）』においては、明確な答えはありません。しかし、わたしたちにとっては、これらの「イザヤ書」の言葉が、イエス様を通して成就したと信じるのが大切なのです。この「主の僕」は、「わたしは主、これがわたしの名」（イザヤ42：8）とある通り、わたしたちが信頼し、信ずるべき神様が、「主（ここには神様の名前が入ります）」であることを改めて示すのですが、わたしたちは、「主イエス命名日」にイエス様が、『主』が救いである」という名前を受けたことを、新年の初めに改めて確認しました。そして、このイエス様は、その生涯を通して、まさに「主の僕」を具体化された方にほかならないのです。本日の福音書の物語もその一つです。

本日の福音書は、イエス様が洗礼者ヨハネから洗礼を受けられた箇所です。イエス様が洗礼者ヨハネから洗礼を受けた意味について、本日の「イザヤ書」と結びつけますと、一つの答えが出ます。イエス様の受洗とは、「主の僕」の具体化の一つであるということです。すなわち、その活動を始められた時、罪の許しのための洗礼、様々な思いを持って自分の順番を待ち望む、他の多くの人々の行列に、謙虚さをもって共に並ばれたということです。

わたしたちはアドベントからクリスマスの期間に、イエス様の誕生にかかわる事柄を学びました。その際に、すでにイエス様の受洗についても学びましたが、クリスマス全体を通して示された事柄は、イエス様の生まれ方が特別であったということです。その活動の結果・十字架も復活も特別と言えます。しかし、その活動の在り方は、苦しむ人々とかけ離れたようなあり方ではありませんでした。苦しむ人々とともにいるというあり方でした。そのことがこの洗礼の出来事にすでにあらわれていたのです。ほかの人々と同じように長い行列に並ばれ、他の人と同じく自分の番が来るまで待ち続けた。この方は特別な方であるが特別ではない。だからこそこの方を信頼してよいのだ、初期の教会の人々は、イエス様の受洗の物語から、そんな思いを受けたのだと思います。

特別ではあるが同時に特別ではない。その矛盾した概念は、現代のわたしたち一人ひとりにもあてはまる事柄です。わたしたち一人ひとは尊い特別な存在です。しかし、それは何らかの地上での特権を受けたという意味ではありません。信仰を通して天との結びつき・主なる神様との結びつきを明確に自覚したことが、特別なのです。だからこそ、地上においては、イエス様と同じように、他の人と共に行列に並ぶような歩みをしたいと思います。

本日「**見よ、初めのことは成就した。新しいことをわたしは告げよう**」（イザヤ42：9）という言葉を確認しました。今年は堅信受領者総会を、3年ぶりに対面式で行う予定です。教会の今後の計画についても話し合う予定です。今までの歩みを大切にしつつ、新しい歩みも創り出していきたいと思います。